

韓 國 併 合 事 情 (上)

小 松 綠

一、
明和元年の二月に朝鮮信使が江戸に乗り込むと云ふ事を聞き、當時憂國の士林子平は仙臺より態馳せ上り、朝鮮使節の堂々たる盛容を路傍より望み見て、感慨措く所を知らず、直ちに國に歸つて國防に關する意見書を藩侯に奉つた。其の中に左の一節がある。

我國は朝鮮、琉球、蝦夷の三國と界を接す、一朝此等諸國より變を生じ、悍馬精兵を以て掩襲し來らば、我國は忽ちにして土

崩瓦解すべきのみ。

林子平は國防論を高唱したので有名な人であるが其の動機は此等の三國を怖れて其の掩襲に備へむとしたのである。其より僅か百五十年も過ぎぬ中に、琉球、蝦夷、臺灣が我が領土となり、朝鮮までも併合するの盛運に達したのである。林子平を地下に呼び起したら嗚かし驚喜する事であらう。朝鮮の併合は眞に數千年來の懸案、少くとも神功皇后以來千七百年來の難問題を解決したものであ

つて、如何にも日本の發展史上に一新紀元を劃する大事件に相違ない。私は僥倖にして此の眞に千載一遇の事件に與ることが出来たのであるから、之に關聯する裏面の事情を叙述して、國史資料の一端に供したいと思ふ。但し事件が餘りに近過ぎる爲め、其の真相を露骨に開陳すると、或は迷惑せらるゝ向も少くなからうと思ふので、極々秘密に屬する部分は、將來の時機を俟つて發表する外はない。

二、

明治四十三年五月三十日に當時の陸軍大臣子爵寺内正毅が現職の儘統監に任命せられたのは、廟議で既に決定し明治天皇の御裁可になつた韓國併合を實行せしめらるゝ爲めであつた。寺内子が韓國京城に着任したのが七月二十三日、夫れから併合條約の調印が終つた日が八月二十二日である。寺内子が統監に任せられた五月三十日から八月二

十二日まで約三ヶ月間が併合の準備と其の實行に費された期間である。今私が述べやうと云ふのは僅々三ヶ月間に起つた事件に過ぎぬのであるが、併し此間の事件と雖も少くとも保護制度實施の當時に遡つて攻究しなければならぬ場合が多いのである。殊に茲に先づ以て一言して置きたいのは、韓國併合の廟議が何時確定したといふ事である。夫れは初代統監公爵伊藤博文の辭職する三ヶ月以前併合實行の時より一年四ヶ月以前の明治四十二年四月十日に確定したと云ふ事が推測せらるゝ事實がある。當時桂首相と小村外相とは韓國を保護制度より一轉して、併合せねば帝國の安固、東洋の平和を望む事が出来ぬといふ意見を固めて居られたのであるが、伊藤統監は當時に於ける内外の狀態に鑑みて急速に韓國併合を實行すると云ふ事は、縦し不可能で無いとしても、頗る困難な事であるといふ考を持つて居られた様に、一般に信じ

られて居つたのである、元來韓國併合を實行すると云ふ事は有史以來の一大事業であるから苟くも政府の要職に在る者が協同一致して之に當らなければならぬと云ふ事は言ふ迄も無い。然るに肝腎の要路に當つて居られた伊藤統監が之に同意されぬと云ふのでは、到底其の目的を達する事は出来ぬのであるから、先づ以て伊藤統監を説服せねばならぬと云ふので、桂首相と小村外相とは當時。歸朝せられた伊藤統監を靈南坂の官邸に訪はれた兩人口を揃へて大に伊藤統監と議論を闘はす積りで、重要書類をも残りなく用意して行つたのである。伊藤統監は併合の計畫を聴き終つて、反對説を唱へられるかと思ひの外、之に對して一も二もなく同意された。兩相が更に細目に亘つて伊藤統監の意見を叩いて見ると、夫れに對しても何の意見も述べられずに直ちに賛成された。そこで桂、小村兩相は非常に緊張した力も抜けて意外な感に

打たれたのであつた。併しこれは失望落膽とは違つて、誠に愉快な柏千坂で、頗る伊藤公の大量に敬服したと云ふ事を、私は後に小村外相より親しく聞いたし、又此の當時の外務次官倉知鐵吉が書面で此の會見の時日を私に知らして呉れた。此の事實に依つて見ても韓國併合に對して山縣派と伊藤派とが各々意見を異にして居つたやうに言ふ者があるが、其れは間違である。と云ふ事が判る。是は前に言つた通り四月十日の事であるが、其から間もなく伊藤統監が一端京城に歸られた時に、私に親しく話された言葉の中に「如何に強い常陸山でも梅ヶ谷でも五人も十人も一度に掛かつて來られては叶ふものでない」と云ふ述懐をせられた事があつた。そして三月月も經たぬ中に統監の職を去つて樞密院議長に轉任せられたのである。此の述懐の言葉と急に轉職になつた事實とを思ひ合はせると、伊藤統監が韓國併合には主義として同意

されたが、其の時機に付ては或は緩急の差が有つたかも知れぬ。併し伊藤公が其の年の十月に近寒を冒して滿洲に赴かれ、哈爾賓に於て露國大藏大臣コ、ツコフに會見せんとしたのは、韓國併合の前提として日露間の意志疏通を圖る任務を以て行かれた事は疑を容れざる處である。哈爾賓驛に到着せられた刹那、朝鮮人安重根の暗殺する處となつて、其の任務を全うする事が出来なかつたのは如何にも残念であつたが、併し伊藤公の死は韓國併合の實行を容易ならしむるに非常な効果を來したのである。誠心誠意を以て韓國の爲に盡力せられた恩人を、韓人自ら手を下して殺したのだから韓國が仆れるのも仕方がないといふ様な觀念を韓廷に與へた。言はゞ伊藤公は一死以て國に報せられたと言つても差支ないと思はれる。以上の事實は韓國併合の廟議が完全に成立し、伊藤公も亦之に賛同せられた事を證明するに充分であると思は

るゝが故に、特に最初に之に言及した譯である。寺内統監が五月三十日に任命を受け、七月二十日に赴任せられる約一ヶ月半の時日は、主として準備手續を整へる事に費されたのである。其の赴任する約一週間以前に京城から警視總監若林資藏が急に上京して來た。若林總監は非常に重大な任務を持つて來たと云ふ觸込であつたが、夫れは當時の韓國太皇帝の秘密書類を發見したと云ふ事。其の秘密書類は手提金庫に納められて京城の佛蘭西教會に委託せられて居つたものを、偶然にも其委託の取次をしたといふ趙南昇と云ふ人の口から洩れた。此の趙南昇は太皇帝の甥であるが、皇太帝の印章を偽造したと云ふ嫌疑で警視廳の取調を受けたところが、其取調の必要上此手提金庫に入れてあつた書類を取出す必要が起つて、佛蘭西教會から取り寄せて趙南昇の面前にて此箱を明ける事になつた。然るに當該事件に關係する書類以外

に三つの秘密書類を發見した。其の一つは韓國が日本の壓迫を受けて非常な悲境に陥つて居るから夫れを各國の元首に訴へて救を求めると云ふ太皇帝が在位中に發送せられた親書翰である。數通あるが其の日付で見ると何れも保護制度實施の前後に發送せられたもの、稿本である。第二は明治四十年六月に海牙に開かれた萬國平和會議に使節を送り、韓國の事情を各國委員に陳述せしむる故、列國の協力に依つて韓國を日本の壓迫より救ふべき手段を採らねばといふ、是れ亦各國の元首に送られた親翰の稿本である。第三は紙片に太皇帝の自筆で書かれた舌代であるが、其は明治四十二年の一月と二月に隆熙新帝が南北を巡狩せられた時に、隨從したる總理大臣李完用と内部大臣宋秉峻の兩人は賣國の臣であるから、壯士を放つて此の兩人を途中に誅戮せらるべしと云ふ獻言に對し其れを許可すると云ふ意味の書付である。此の中

第一の求援狀に付ては世間に知られなかつたが、海牙密使事件は太皇帝が光武帝として在位中の事で、終に責を引いて其の位を退かれた程の大事件であつた。李完用及宋秉峻誅戮問題は新聞に一寸出たが、誰れも當時信用した者はなかつた。是等の秘密書類を發見したと云ふので、若林總監の意見では、併合を實行する上に於て痛心に堪へぬのは太皇帝を圍繞して居る所謂雜輩の隱謀であるが太皇帝は賢明な人であつたけれども、其賢明であるだけ、却つて周圍の雜輩の誤る處となられるから、暫く太皇帝を京城から遠ざけると云ふ手段を採つては如何であるかと言ふのである。是れは頗る重大な問題である。そこで此時外務部及參與官の職に在つた私の意見を求めらるゝ事になつた。私は若林總監の意見は至極事宜に適したるものと考へるが、併し今は時機が宜く無い。併合の大事を決行しやうと云ふ矢先に太皇帝を京城より動

かすこ云ふのは考へ物であらう。之に由つて或は陰謀の中心を遠けると云ふ効果が有るのは相違なからうが、他の一方に於ては人心に對して非常なる刺戟を與へる憂がある。隨つて圍滑なる談判を遂行する上に於て意外な支障が起るかも知れぬ、此問題は差當り此儘に、俗に言ふ責め道具として保留して置き、他日適當の時機に於て必要の措置を取る方が得策でありはせぬかと云ふ卑見を述べた。何分統監の出發も差し迫つて居つたので、何れにしても京城に到着した上に於て決定しやうと云ふ事になつた。此の重大なる發見に對し、幾分たりとも効果を與へんが爲め、間接の方法に依つて此の事實を太皇帝の耳に達せしめて、其の警戒心を喚び起さしむる事は差支なからうといふ事に極まつて、若林總監は一足先きに歸つて行つた。

寺内總監一行は明治四十三年七月二十三日に京城に到着した。統監は直ちに新任披露として隆熙帝竝に太皇帝を歴訪せられ、更に韓國の内閣員を招いて形式的の挨拶を交換せられたのである。新帝に謁見せられた時には別段變つた様子も無かつたが、太皇帝に拜謁せられた時には、以前に變つた現象を見たのである。と云ふのは會見室には我が皇室より曾て贈られたる花瓶を立て廻し、又我が皇室より贈られたる花瓶をテーブルの上に置かれるなど、未だ曾て見ない現象である。殊に太皇帝は嫻然なる温容を以て、自分は近頃全然意を世事に絶つて美術品を遊び、或は花卉盆栽などを樂んで居ると云ふ事を繰返し話された。之に依つて我々は曩に若林總監の祕書書類發見が隠然多大な効果があつた事を感じたのである。最早太皇帝が陰謀の中心にならるゝやうなことはあるまいと心を安んじた。夫れより約二週間の間、統監は普通事務の處理以外に何等特殊の政治方針を示さるゝ事なく、全然沈黙を守つて居られたのである。是に

於て韓國官廷の心配は一方ならぬ様子で、如何なる條件を持つて來られたかと云ふ事に付て、干々に心を碎いたやうに見わた。此時に於ける韓國の實況を讀者の心眼に浮べんが爲に、多少既往、遡つても、其の概略を述べて置かねばならぬ。

凡そ演劇を観るにしても、先づ各種の役を勤める處の役者の性質を知らなければ興味が乘らぬものである。況んや一國の併合と云ふ大事件の活劇に於ては、先づ其の重立ちたる役者の人物性行と其の心情とを知らないで、能く事の真相を了解することができぬ。此時朝鮮政府の首腦は時の總理大臣李完用、副總理とも言はれて居つた人が農商工部大臣趙重應、其から曾て内部大臣をして居つたが、伊藤公と意見を異にした爲めに辭職した宋秉峻、此の三人が朝鮮側に於ける重要なる立役者である。李完用と云ふ人は極端なる親露派から極端なる親日派に移つた人であるが、是れは決して

感情を以て其の進退を二三にした譯では無い。所謂君子は豹變すと云ふので、全く國家本位の誠心から其の態度を定めた人である。明治三十一年に親露派の面々が光武帝を露國公使館に移して、時の日本黨内閣を打ち毀し、首相金宏集以下二三の大臣を白晝公然路上に斬殺せしめたと云ふやうな横暴を逞うした事があつた。此の親露派の首腦が即ち李完用であつた。然るに日露戰爭後に至り、李完用は天下の形勢が一變した爲めに、日本の勢力に依るに非ざれば、到底韓國の幸福を圖るに由なしと云ふ事を見透かして、夫れよりは非常に強固なる親日派と化して了つた。明治三十八年の十一月に保護條約を締結した時に、時の總理大臣の韓圭高は極力之れに反對し、又侍從武官長閔泳煥は此の條約に賛成せし大臣を斬す可しと上疏して自刃し、前議政府大臣趙秉世も亦反對意見を固守し、終に毒を仰いで自殺した程の状態であつ

たに拘らず、當時内閣の一員として僅かに學部大臣の椅子を占めてゐた李完用、獨り毅然として保護條約の締結に賛成し、一日本が強露を倒した戦勝の勢ひを以て韓國に臨むのであるから、何事も其の心の儘に斷行ができるのに、今合意的條約を結ばむとするのは、寧ろ寛大の處置と謂ふべきである。吾々は其の好意を諒とす可きである、之に反抗した處で、唯々日本の感情を害するのみに止つて何等の効が無い」と論争して、遂に多數の閣員を説き伏せた。されば保護條約の調印は李完用の力に負ふ所が多かつた。かういふ事情から李完用は伊藤統監の幹旋で學部大臣から總理大臣となつたのである。其から趙重應は名門の出で夙に秀才の譽があつたが、魚允中、金玉均の一派に屬してゐた爲めに、閔黨の壓迫を蒙り、其れを遣れんが爲に日本に亡命し、十年間も滞在して居つた人である。李完用が内閣の首班となつた時分に韓國

へ歸つて、一時は統監府の監督の下に在る農業模範場の顧問となつたが、伊藤統監の拔擢に依つて初めは司法部大臣となつたが、此の時は農商工部大臣になつてゐた。此の兩人は能く日本の眞意を諒解し、日本の爲に盡さうと云ふ誠意を持つて居つたのは勿論である。宋秉峻は元と大院君の恩顧を承けて居つた人であるが、是れ亦閔族の恨を受けて日本に亡命した人である。日露戦争の時に韓國に歸つて日本軍の通譯となつたのであるが、機智才略に富んだ男で、當時の日本軍が非常に困難を感じた軍需品徵發に力を盡した。親日派の韓人を翕合して一進會を組織して、其の手で物資も人員もドン／＼徵發した。一進會とは一致進歩と云ふ意味から取つたのである。渠が日本に居つた時に、日本の文明が韓國よりも非常に進んで居ることを深く感じた所から、日本と俱に提携して行かなければ韓國の進歩を圖る事は出来ぬと云ふ事を

何時も心に銘じて忘れなかつた人である。言はゞ其の精神から云へば殆んど日本人になつてゐて、姓名も野田平次郎と稱してゐた。渠も伊藤統監の識拔を受けて一躍内部大臣の榮位に就いたのであるが、伊藤統監の政策を以て微温的で姑息であるを見て、斷然日韓合同するに如かずと考へて、合邦論を唱へ出した。處が伊藤統監は時機尙早しと認められて之に同意されなかつた。同意されないのみならず寧ろ韓國の人心を緩和しやうと云ふ考から、新帝に勸めて南北巡狩を實行して皇帝の尊き事と、其から自分が統監として韓國の扶掖に盡瘁してゐる眞意を徹底せしめやうと企てられたのである。是れは宋秉峻の合邦意見とは全然背馳する遣り方であるから、宋秉峻は無理に辭職して東京へ行つて了つた。宋秉峻が東京へ着くと直ぐに桂首相を訪うて合邦論を唱へ出した。桂首相は其の趣意は善しとしても實行上困難では無いかと言はれると、宋秉峻は「其は譯も造作も無い事で、私に一億圓を下さるならば直ぐに合邦の實行を遣つて見せませう」「一億圓と云ふ金は當時財政殊の外困難な日本政府としては大金である。餘り高過ぎはしないか」と言はれると、宋秉峻は「八千六百万方哩の面積と二千萬の人口を持つてゐて、そして其の富源は何十億何百億とも知れぬほどの韓國を買ひ取る代價としては頗る安いものである」と答へた。綠日の植木屋と素見客の談判のやうな事で別れて了つた。實際併合實行の爲めに費した金額は僅かに三千萬圓であつたから、宋秉峻の言値の三分の一で濟んだ譯になる。其れは後の話であるが、宋秉峻は其から一進會を促して合邦論を盛んに唱へしめたものである。其は寺内統監の京城に到着された時から殆ど八ヶ月以前の事である。が、其の趣旨は先づ以て日本の富強と韓國の貧弱とを對照し、韓國は日本に頼るに非れば自立する

能はざるが故に、早く日韓合邦を創立し鳥の雙翼の如く車の兩輪の如くとなつて東亞の時局を維持するを目的とし、韓國民より言へば保護國民又は劣等國民の名實を脱して、新大國、世界一等國民の列に上るの榮譽を得るに至ると云ふのである。

是れは多分聯邦政治を理想としたのであつて、眞の併合を望んだのであるかどうかは表面上明瞭で無かつたのである。併し斯う云ふ趣意を以て二百萬の會員を有する一進會が、國民全体を代表すると號して日韓兩國政府は猷策をしたのである。之が爲に非常に物議を起したのは言ふ迄も無かつたが當時の韓國內閣は極力之に反對したのである。寺内統監が京城に着された時分に、宋秉峻は京城に來て一臂の力を假したいといふ事を申込んだのである。併し寺内統監は別段宋秉峻の援助を求むる必要なしとして渠の入韓を止めたのであつたが宋秉峻は心配でたまらなかつたと見え、遂に馬關

まで出馬して來て、何時でも必要に應じて玄界洋を渡つて朝鮮に入り込む氣勢を示して居つた。之が爲に猜忌深き韓國政客の間には、寺内統監が宋秉峻内閣を作つて併合實行の局に當らしめやうと云ふ考を持つてゐるなど、疑つてゐた。

當時の情況はざつと以上述るやうなものであつて、李完用、趙重應等が、如何なる使命を以て寺内統監が來られたかと云ふ事に付き並ならぬ心配をして居つた事は察するに餘りある。然るに寺内統監は着任以來少しも併合の問題に言及されない爲に、韓廷の煩悶は益々其度を加へると云ふ狀況であつた。寺内統監が沈黙を守られたといふ事の理由は、當時の韓廷が果して圓滿に併合條約を締結する丈けの決心ができて居つたかどうかと云ふ事を窺はむとせられたからである。丁度其の後二週間を経過した八月十一日の夜中に、突然李人植と云ふ人が私を官邸に訪うて來た。此の李人植と

云ふ人は趙重應と共に日本に亡命した者で、學才があつて文筆にも達した人である。當時李完用の秘書役を勤めて居つて、趙重應とも極く親密な間柄で在つた。此の兩人が東京に居つた時分に、其れは明治三十年前後であつたらう。私は星亨、松本君平などゝ一所に、神田の政治學校で講師をして居つた事がある。其の時に私が各國の政治制度を講演した筆記を講義録に連載した事があつたが其れを兩人が非常な興味を以て講習したと云ふ關係から、私が明治三十九年の初に、伊藤公と共に朝鮮に行つてから以來、私を舊師だと言うて交際をしてくれた。其の關係から李人植は時々私の宅を訪問したのである。初は別段使命を以て來たと

も思はなかつたのであるが、李人植は非常に沈鬱な容色を以て、「實は今日まで未だ曾て打明ける事が出来なかつたやうな重大な事件に對し教を請はんが爲に夜中乍ら參つたのであります」と云ふ前置の後に、大體下に記述するが如き問答を交換したのであるが、是れは一場の私談に過ぎないのであるけれども、實は此の李人植は首相李完用の旨を承けて細作の役目を以て來たのである。私も其の旨を諒として自分一己の意見で無く、寺内統監の言はんとする處を答へたのであるから、言はゞ是が併合談判の先驅とも言ふ可きもので、戰爭で言へば斥候戦とも視る可きものである。特に詳しく話す事にする。

考古學の葉

(第五回)

文學博士 濱田耕作

第四章 研究

一 資料の整理